

歴史的まちなみ再生による地域の自立について（下）

- 倉吉、鹿野、智頭の事例を通じて -

調査研究部長代理 澤田 廉路

第4章：鹿野町鹿野地区について

4.1 鹿野町の位置・地勢と歴史

4.1.1 鹿野町の位置・地勢

鹿野町は面積が52.77km²で、東・西・南の三方を山々に囲まれ町域の約60%が標高200m以上の地である。南部の鷲峰山（標高920.8m）などに水源をもつ河内川・水谷川・未用川・浜村川の流域の平坦地を開けた河谷平野に集落は分布する。

南部の鷲峰山（標高920.8m）などに水源をもつ河内川・水谷川・未用川・浜村川の流域の平坦地を開けた河谷平野に集落は分布する。

気候は裏日本式気候の山陰型に区分され、やや温暖だが、冬は北西の風が強くて降雨・降雪が多い。年平均気温14℃を上回り、年間降水量3,378mm（平成3年過去3年平均）で県内でも多い地域である。

4.1.2 鹿野町の歴史

中世における鹿野町は軍事上・交通上の重要拠点として隣国但馬（山名氏）からの侵入や出雲・安芸方面（尼子・毛利両氏）からの侵入、さらに豊臣秀吉軍の侵入など争奪攻防の的となったが、尼子の遺臣で早くから秀吉に従い、鳥取城攻めの戦功の大きかった亀井茲矩は天正9年、気多郡1万3800石を得て鹿野城主になった。亀井茲矩の登場により平静を得て、その後は城下町、近隣の物産集散地

として発展していった。

茲矩は関ヶ原の合戦では石田三成と意見があわず、徳川家康の東軍に組みして戦い、高草郡2万4200石を加増され、3万8千石を領有した。茲矩から家督を引き継いだ政矩は5千石加増され4万3千石の所領になった。

しかし、鹿野城は元和元年の一国一城令により破壊され、元和3年、石見国津和野城に転封の幕命が下り、茲矩の子亀井政矩が津和野に転封されると、これ以後鹿野は次第にさびれていった。

亀井公の時代は、天正9年（1581）から元和3年（1681）までの37年間、亀井茲矩、政矩2代にわたる期間である。この間、新田開発、植林、治水、殖産興業、御朱印船貿易等々、実に刮目すべき治政が実施され、「鹿野」が歴史の中で一番輝いた時代である。

鹿野のまちはこの時代にかたちづくられていったのである。まず、亀井茲矩は鹿野周辺を流れる河内川、水谷川、未用川等の流路を改め、大がかりな改修を行い、城の外郭を整備した。

近世初期の城下町の神社、仏閣の配置は、軍事上の拠点として配慮、重視されたものであることも忘れてはならないが、茲矩は城の周辺に侍屋敷を配置し、その外側に町屋を設けた。現存する町名は、小屋根・紺屋町・上町・立町・下町・鍛冶町・山根町・大工町であるが、これをみても、鹿野には商工業者の職人町があったことが分かる。そのほか、

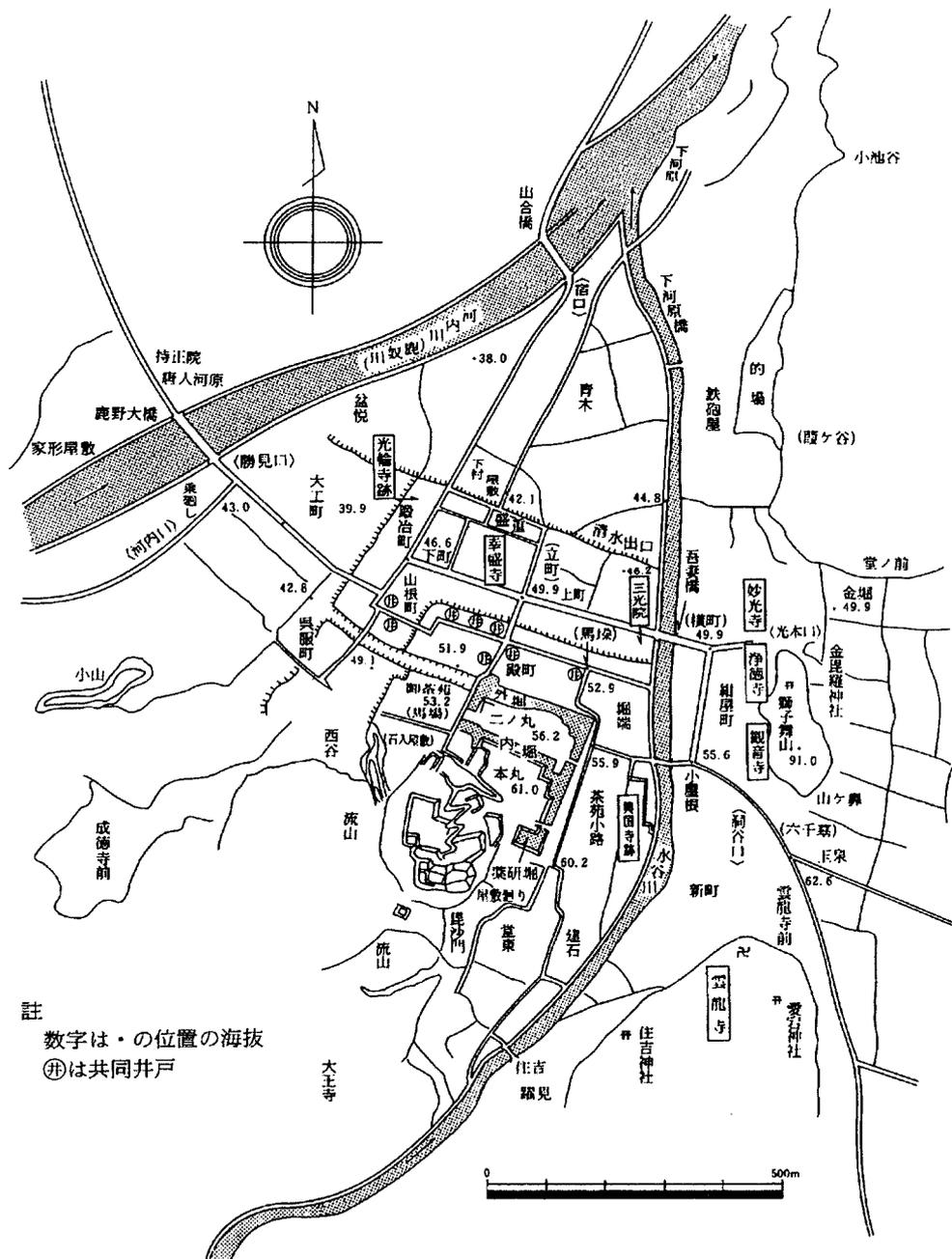
『拾遺鹿野故事談』によると、「津山町・八日町・新町・魚町・茶町・河原町・スヤマ町・呉服町・ノボリ町・本町・油点町」等の町名が記されている。このうち、茶町は「茶苑小路」付近、河原町は紺屋町から雲龍寺に至る道の南側、この隣に新町、魚町は字「下町北側」の北、呉服町は大工町の南側にあったと伝えられている。新町は町の大半が宝木に移り、宝木新町を作った。

街路は、城下町特有のT字路、L字路が各所にみられ、遠見遮断が考えられている。道

路の幅員は商業の中心地区とみられる上町・下町が約二間半で広く、職人町の大工町付近では約二間となっている。また、侍屋敷は一間～一間半で狭く、屈曲点を多くし防衛上の配慮がうかがえる。

紺屋町、上町、下町、山根町、鍛冶町、大工町、殿町、立町の幹線道路の側面には水路が作られており、随所に石造の「せき」が設置され、防火用水として水をたたえ、緊急事態に対応できるようになっている。

池田藩政に変わっても亀井公以来の城下町



註
数字は・の位置の海拔
⊕は共同井戸

図4-1 鹿野城下復元略図(鹿野町誌 上巻1992年より転写)

としての伝統を持ち続け、「城主ナケレ共以前ノ城下の遺風スタラス、所ノ名モ鹿野町ト稱シテ鹿野村トイハス。今モ町ノ中ニ農商入りマシリテ、商家多クアレバ鳥取ノ城下ニモ彷彿セル町小路ナリ。」と『勝見名跡誌』に宝暦年間（1751～）の鹿野の様子を伝えている。しかし、主要な街道から外れていたためもあって在町としての発展には限界があった。

明治3年には鹿野村が成立して、翌年には鳥取県に所属するが明治9年には島根県の所属になった。しかし、明治14年には再び鳥取県の所属になり、明治32年には鹿野村に町制が施行された。昭和30年には、1町2か村が合併して現在の鹿野町が誕生したが、殿町・御茶苑・堀端・鉄砲屋・的場・鍛冶町・大工町・紺屋町などの地名が残り、亀井公以来の中世末期の城下町風情が今も残されている。

4.1.3 調査対象地区の位置づけ

鹿野地区は亀井公以来400年の歴史の中で文化をはぐくみながら、歴史で触れた遠見遮断をするT字路やL字の街路の他、切り妻家

屋や格子戸のまちなみ等城下町風情を残し、神社・仏閣も地区内に点在する。

現在の鹿野地区の家屋は昭和18年の鳥取大震災（鹿野町が震源地）で、建て替えられた家屋が多く、それらのものの中には老朽化が進み、最近新築改築されるものが多くなった。和風建築の多いまちなみに不具合なデザインの洋風建築もあられ、また、空き家、空き地となってまちなみの連続性が途切れ、伝統的な景観を阻害する例も散見されるようになった。

鹿野町では亀井公ゆかりのこの地域に残る「城山神社祭礼」鹿野祭りの御幸行列が映える「祭りの似合う街」を町の整備構想の柱にして、平成6年鹿野町基本構想を策定した。これをもとに、地区住民が主体的にまちなみ整備の指針をつくり、現在、国庫補助事業「街なみ環境整備事業」を御幸行列が繰り出す三つの通り8地区、約350世帯で実施している。

道路や水路、石灯籠などの環境整備は町がするものの、窓格子や腰板に漆喰の外壁など



図4-2 鹿野町鹿野調査対象地区「街なみ環境整備事業」資料より

個人の住宅整備の基準をつくり地区ごとに街づくり協定書が全世帯の署名のもとにつくられている。

筆者もこの事業の半ばより深くたずさわったが、この歴史を大切にしている「鹿野」地域の実態について把握し、検証するものである。

4.2 人口・世帯数等の特性

4.2.1 総人口および世帯数の推移

鹿野町の総人口は昭和30年の勝谷村、小鷲河村を合併して、現在の鹿野町になって以降、6,055人（S30国調）から徐々に人口を減らし、昭和45年の5,043人以降は5,000人を下回り、平成7年（1995）は4,598人、平成12年（2000）は4,594人と減少にやや歯止めがかかった様子である。

しかし、逆に65歳以上の高齢者は昭和30年（1955）の493人が、平成12年（2002）では2.8倍の1,278人となり、高齢化率は平成2年（1990）より20%を超え、平成14年は29%である。

また、15歳未満の年少人口は昭和40年（1965）には1,597人であったが平成14年（2002）には650人まで大幅に減り、多い時の約4割の人口となっている。子供がいなくなり、高齢

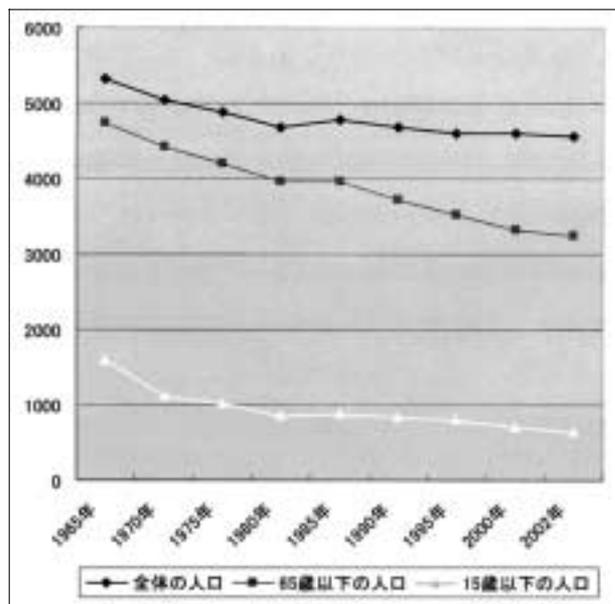


図4-3 鹿野町人口推移

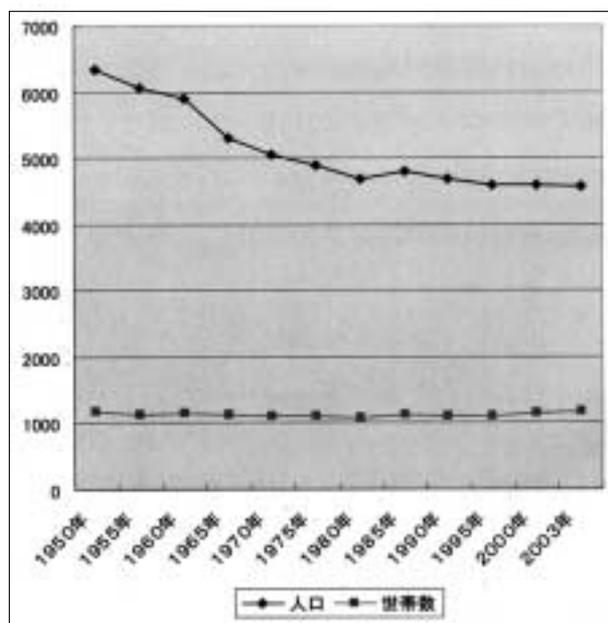


図4-4 鹿野町における人口と世帯数の変化者の多い町となっている。

昭和40年（1965）から昭和60年（1985）までの人口減少は大きいですが、それ以降は鈍化している。温泉付きの住宅団地の開発などが下げ止まりに大きく影響していると考えられる。

人口は減ったものの世帯数は昭和30年代とほぼ一緒の1,100世帯前後である。人口構成からすると年少の子供を持った若い世代が減り、独居や老夫婦だけの世帯が増えている。65歳以上のいる世帯は昭和40年代には全世帯の約4割であったが、今は7割近くある。

4.2.2 鹿野地区の人口推移

町内ごとの古いデータがないが、鹿野町全

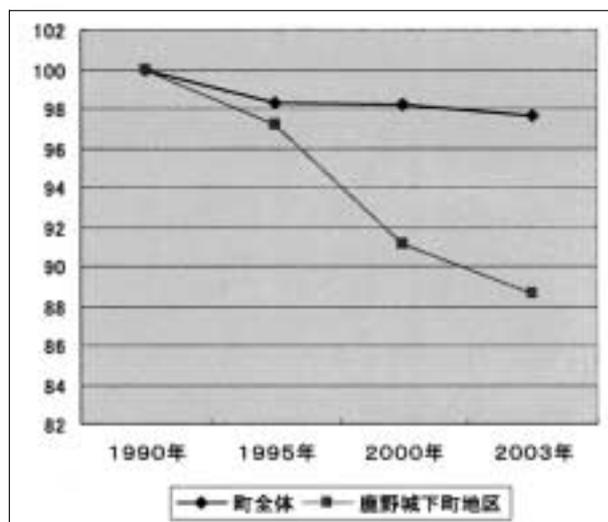


図4-5 鹿野町及び城下町地区人口推移（指数）

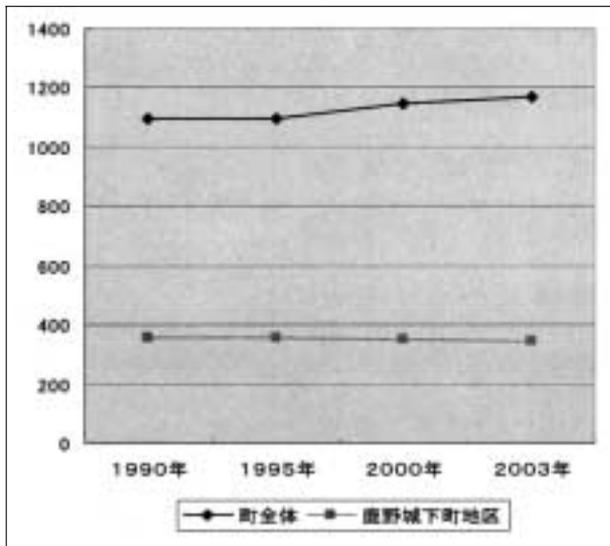


図4-6 鹿野町及び城下町地区世帯数推移

体では昭和40年（1965）代からほぼ人口を現状維持してきており、世帯数においては若干の伸びが見られる。その中であって、町の中央にあたる鹿野の城下8町内はデータの残っていた平成2年（1990）以降について見ても、1440人が1276人と10%以上の減少がある。世帯数も人口の減少ほどはないが358世帯が342世帯とやや減っている。町全体の人口減の歯止めになっている一つは国道9号に近く、源泉のある勝谷地区で、温泉付きの宅地分譲なども影響している。山間部である小鷲河地区

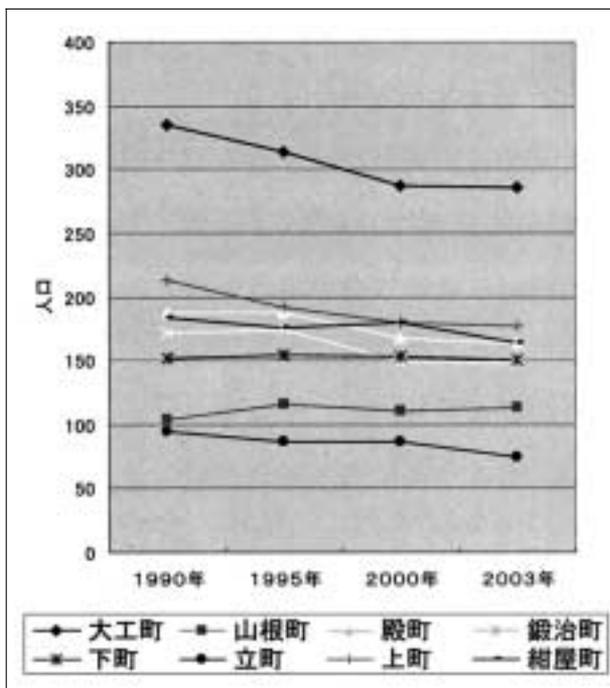


図4-7 鹿野町城下町町内会別人口推移

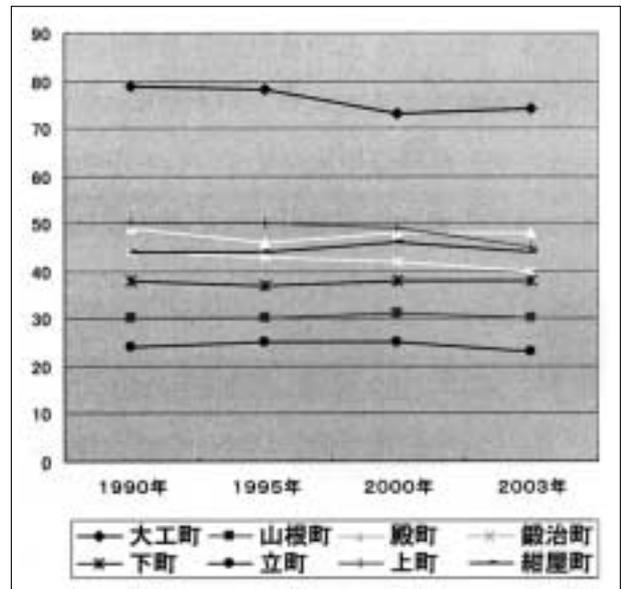


図4-8 鹿野城下町町内会別世帯数推移

等は人口、世帯数とも減少は大きい。

4.2.3 町内別人口・世帯数の推移

鹿野城下の8町内のうち山根町だけが減少していないがあとの7町内とも減少している。減少の大きいのは立町、上町、大工町で、平成2年（1990）から平成15年（2003）までにそれぞれ94人から75人へ、213人から177人へ、335人から286人へと減少している。その他1.5割以内の減少である。

世帯数は同時期で上町の50世帯から45世帯、大工町の79世帯から74世帯、鍛冶町の44世帯から40世帯の減少の他はほぼ同数である。

世帯数が減らず、人口が減っているが、町の人口構成から考えると高齢者の単身世帯や高齢者夫婦の世帯が多い。

4.3 アンケートによる居住の実態と意識の変化

4.3.1 調査地域の居住形態

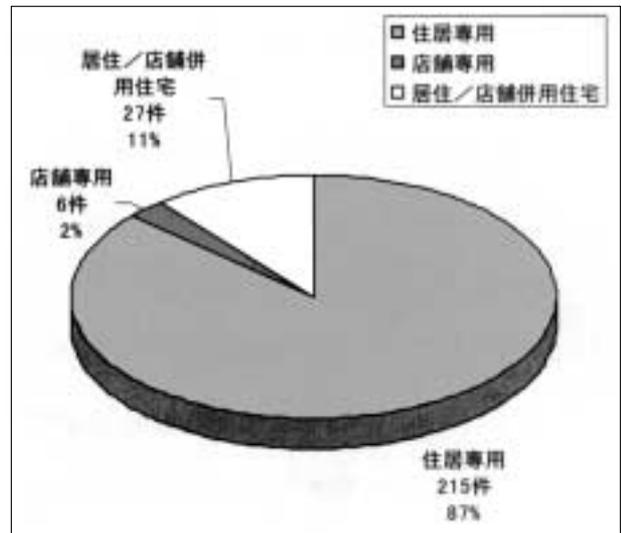
この調査対象342世帯のうち250世帯から回答があった。

有効な248世帯の回答のうち87%にあたる215世帯は住居専用であり、完全な住居地であることがわかる。店舗はわずかに6件の2%である。

4.3.2 土地利用、業務の現況と今後の動向

住宅及び住宅に付属する倉庫・物置がほとんどで、神社、仏閣が2～3%をしめる。その他の業務用施設は地区内にはほとんどなく、役場前の県道沿いに移転している。なお、J A跡地など空き地、空家も散見される。

今後、「住み続けるか・事業をつづけるか」の質問に答えた210の回答のうち、住居の地区外予定は2、店舗の地区外予定は1の回答であった。



A - 3 この建物の全般的用途



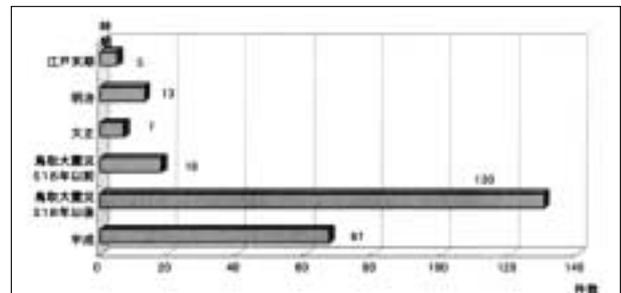
図4 - 9 鹿野地区空き地・空家現況図「街なみ環境整備事業」資料より

4.3.3 まちに対する意識の変化

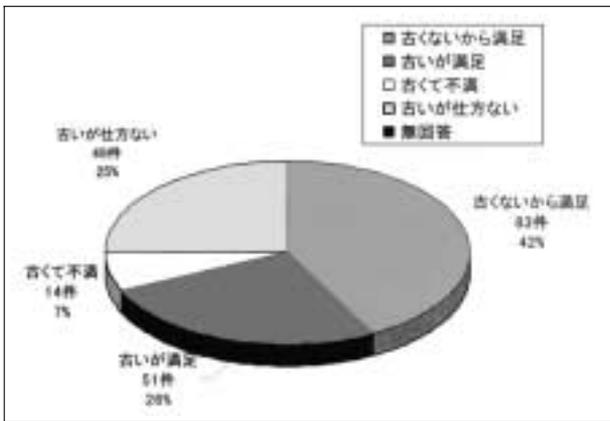
古いまちなみが残り、400年の伝統がある祭礼「鹿野まつり」が今も行われているこの地域の人達のまちに対する意識はどうなのだろうか。

まず、アンケートで建物の建設年代を尋ねた。総数240の中で江戸末期が5件、明治時代が13件、大正時代が7件もあった。年代に見れば十分、文化財になりうる家屋である。また、この地区は昭和18年の鳥取大震災の震

源地であったため多くの家屋が倒壊し、それ以後に建てられたものが多いので、それらの建物も含めた昭和18年以前の建物は震度6に



A - 4 この建物はいつ建てられましたか

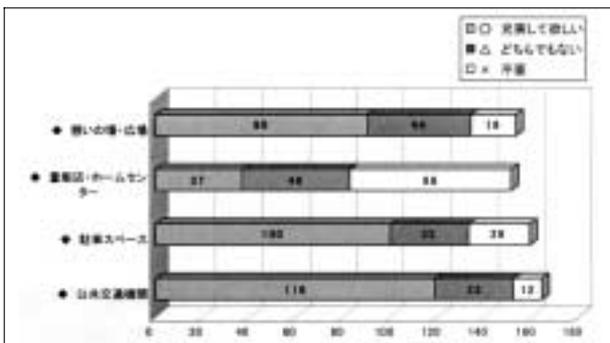


B - 8 建物の古さと満足度

耐えたしっかりした家屋であるといえる。

建物に対する満足度は68%と高い。「古くて不満」はわずかに14件、7%である。

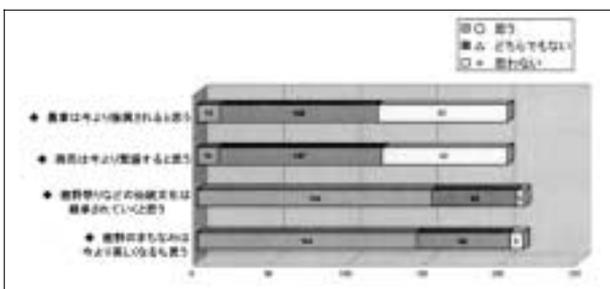
また、地域内の生活の利便性に対する要望では、公共交通機関に対するもの、「駐車スペース」に関する要望が高い。まちなみ整備に併せて注目すべきは「憩いの場・広場」の要求がかなりあることである。



D - 8 - 1 地域内生活の便利について、充実してほしい点

今後の鹿野に対する見通しとしては、農業、商売に関する見通しはほとんどないものの、鹿野の伝統文化である祭りや、まちなみに関しては否定的な考えはない。

事業実施の影響からか、まちなみが美しくなるとの意見が多い。



D - 14 今後の鹿野について

4.4 歴史的まちなみを活かした今後の方向

4.4.1 祭りの似合うまちなみ整備

歴史的なまちなみや伝統があるにもかかわらず、それを十分活かしていないのではないかと鹿野まつりを運営する若者衆がまちづくりのボランティア団体「セクションドリーム」を平成7年に設立、鹿野町役場も平成6年策定のまちづくり指針にもとづき、平成7年に街なみ整備基本方針を定めて「景観に優れた住環境を創出し、住民が誇りをもって定住でき、また観光にも寄与できる街なみの形成」を目指して、平成8年度から建設省の「街なみ環境整備事業」を活用した景観整備に取り組んだ。

日本瓦葺きで、平入りとして、外壁は極力鎧風の板張りや漆喰を使用するなどの住民協定がこの祭りがくり歩く、8町内すべてで結ばれた。



鹿野町街なみ環境整備事業パンフレット（平成8年）



まちなみ整備かわら版（平成14年6月）より転載

4.4.2 鹿野夢本陣のオープンと住民の反応

鹿野夢本陣は鍛冶町にあった空き家の有効活用をセクションドリームのメンバーが「いんしゅう鹿野まちづくり協議会」に会を改組して取り組み、実現したものである。

まちづくりの目的を達成するための施設として、

- まちづくり活動の事務所機能
- 協議会会員と町民のコミュニティーセンター機能
- 伝統工芸品の作成 伝承機能
- 食品加工品の生産・開発機能

を持たせて平成14年6月実施開始したがまた十分機能していない。

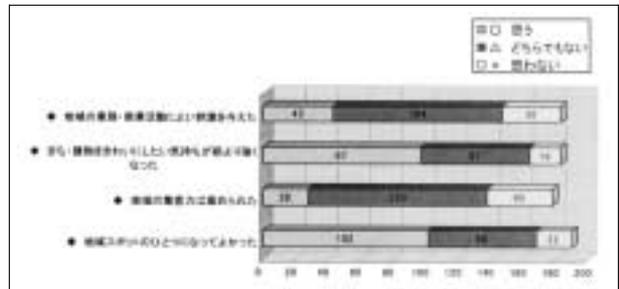
「スポットになってよかった」との意見もあるが、「どこにあるのか知らない」との意見もありまだ認識度が低い。空き家がきれいに整備されたので、まちをきれいにしたいとの意見が多かった。



夢本陣（外部）



夢本陣（内部）



D-13 「鹿野ゆめ本陣」の成立が地域生活に与えた影響について

4.4.3 「街なみ環境整備事業」のまちづくり

事業着手にあたっては、行政主導ではなく住民主導による街づくりを進めることとし、整備目標を住民が目的達成に向けて一丸となって取り組める、共通の価値観「祭り」に設定。住民主導で鹿野祭りの似合う和風の街なみ景観形成に取り組んでいる。

もともと整備の基本方針の策定の段階から、住民代表による検討委員会を組織し、そこで話し合いを基に、通りごとの特徴をより顕在化させるため「祭り通り」「城山通り」「水音通り」など整備テーマを決め、これに相応した整備を推進すること、また空き地、空家及び水路等を積極的に活用して、地域住民等の利便性やコミュニティー活動に寄与できる施設を整備することなどを取り決めて実施された。

この大枠をもとに、行政と8自治会それぞれで整備案を検討し、計画を策定している。



高田年康邸土蔵修繕工事

まちなみ整備かわら版（平成14年6月）より

策定にあたっては、行政が自治会にたたき台を持ち込むのではなく、大枠だけ示して、白紙の状態から内容を検討してもらい、8自治会それぞれが住民発意による独自の整備計画を策定した。

これには「自分たちの街は自分たちでつくる」という住民意識の定着を進める大きな意味もあり、まちなみ整備が行われている。

第5章：智頭町智頭宿について

5.1 智頭町の位置・地勢と歴史

5.1.1 智頭町の位置・地勢

智頭町は総面積224.61km²（93%が山林）で鳥取県の東南部に位置し、周囲は1000m級の山々が連なり、これらの山間を縫って流れる土師川、新見川、北俣川が智頭で合流して、千代川となり、盆地状の谷底平野を形成している。千代川は下って日本海に注いでいるが鳥取平野を潤し、その源をなす智頭町は水源涵養の面からも重要な役割をもっている。気候は内陸型気候区に属し、年平均気温は12.5度、降雨量は1,500～2,000mmである。

また、古来より畿内、吉備と因幡を結ぶ交通の要衝であり、現在も山陰と山陽を結ぶ国道53号線、JR因美線、京阪神へ通じる国道373号線を始め、関西、瀬戸内方面からの主要な路線が智頭で交わる。鳥取県の東南端の山間地にありながら、山陰、鳥取県の表玄関の位置を占めている。県都の鳥取市へは約30

分、大阪へは鉄道で約2時間、自動車（一部高速道路）使用では約2時間30分で結ばれている。岡山市へも鉄道で約1時間30分、自動車では約2時間の距離にある。

5.1.2 智頭町の歴史

『日本後紀』大同3(808)年に「因幡国智頭郡道俣」で道の分かれる所を意味し、智頭には古代の駅制で役人が公的な業務に使用する馬「^{えきば}駅馬」が現在の智頭宿付近に置かれていた。

智頭宿が、現在のよう^{かんまち}な上町の高まりができ、江戸時代の宿場を形成していくのは、文禄2(1593)年8月におこった、いわゆる「高麗水」と呼ばれる大洪水によって、裏山の会下山が崩壊し、興雲寺が押し流されて以後、江戸時代初めより山の手を中心に次第に拓かれ、中心の舞台が下手に移動していったと考えられる。

藩政時代の智頭町は、寛永9(1632)年8月、御制札場が智頭と中原に設けられてより、宿場として拓かれていった。

制札には領民の心得、弊賃・人足早・宿賃、筏流しの基地として筏師の賃金などが定められたが(在方御定)、なお、智頭宿といわれるようになるのは、元禄14(1701)年頃の国絵図改めからである。

慶安元(1648)年から始まる参勤交替は、1年ごとに江戸へ参勤、翌年帰国する習わしで、その止宿地が智頭であったことから、藩

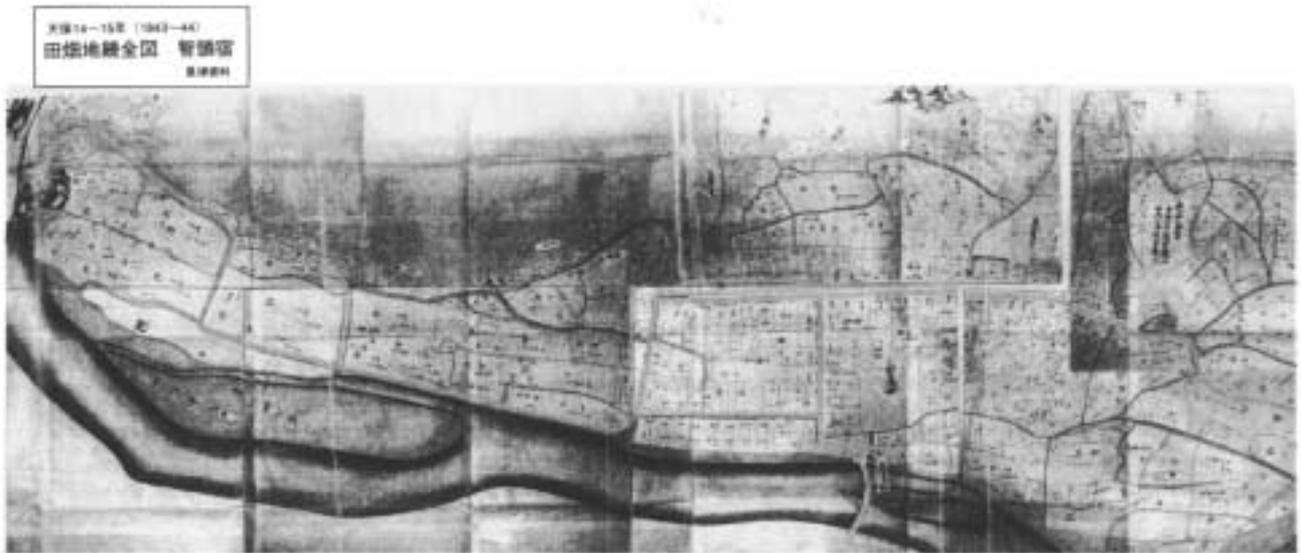


図5 - 1 「田畑地続全図 智頭宿」(1843～44)(鳥取県立博物館蔵)

主が宿泊する「御茶屋」や、家臣が定宿とする町家、馬繋ぎ場や目付屋敷として「下ノ御茶屋」が建設され、整備されていった。参勤交替の折には、供の数も300人は下らなかったといわれるから、宿泊の接待に要する賄いの人数は相当なもので、一泊の準備には、寝具の搬入に200人以上の人たちが集められたし、荷物の運搬には100頭近くの馬が、遠くは伯耆からも徴用され、人々によって混雑した。

智頭宿は、上方、備前から商品や文物が交わる交通交易の要衝で、「格別な場所柄」として市も月6回開かれ、他国、在方の商人、町方等で賑わった。

図5 - 1の天保14～15年(1843～44)の「田畑地続全図 智頭宿」(鳥取県立博物館蔵)を見ると、往来の真ん中に水路を通し、ひときわ大きく「御本陣」と「下ノ御茶屋」、大庄屋を務めた塩屋・篠屋などの町屋・家屋敷が200mにわたって軒を連ね、さらに備前橋を渡って備前街道に面する河原町にも、職人通りが延びている。あまりの賑わいに、藩では、弘化元年(1844)と嘉永7年(1854)のお触で、小売り商人の逗留を禁止したが、智頭宿の町並み形成の背景には、こうした繁盛の歴史や営みがあったのである。

お茶屋は、明治4年の廃藩置県の際、跡地

が払い下げられ、一部が智頭尋常小学校の建設にあてられることになった。

智頭宿は明治21年の町制施行により智頭村となり、明治29年の郡制により、八上・八東の「八」と智頭の「頭」をとって八頭郡が誕生し、郡役所は郡家町に置かれた。大正3年の町制施行により智頭町となり、昭和10年に智頭町、山形村、那岐村、土師村が広域合併、同11年富沢村、同29年に山郷村を合併し、現在の智頭町になった。

5.1.3 調査対象地区の位置づけ

古来より交通の要衝であり、江戸時代は鳥取藩の宿場町として歴史的な背景にあるように栄えた。その町並みは山林地主である石谷家住宅、米原家住宅(明治35年以前は国米家)などを含む約300mにわたって伝統的なまちの面影を残している。この智頭宿を含む千代川の右岸に沿って約800m、幅約200mの細長い街区を形成している。幸いなことに、この智頭宿をさけて千代川右岸上に国道53号線が設けられたため、伝統的なまちなみは残ることとなった。

智頭宿は現在、上町、中町、下町地区にわかれているが、天保14～15(1843～44)に作成された「田畑地続全図智頭宿」の古図と旧道を中心とした地区一帯の町割がほぼ一致し、



図5 - 2 「智頭宿歴史・文化財地図」歴史をいかしたまちづくりの構想（智頭町他）

本陣跡、神社仏閣等の所在がはっきりと確認できる。山沿いの諏訪神社（本殿は天保3年（1832）拝殿は明治37年（1904）建立）光専寺（本堂は天保11年（1840）建立）興雲寺（本堂は明治24年（1891）の建物）など歴史のあるものがそのまま残っている。また、旧道沿いの民家として、石谷家、米原家等明治末期、大正時代の山林地主の近代和風の見事な邸宅がある。その他、江戸末期の道標、明治時代の町火消頭領の碑、諏訪酒造、塩田屋旅館、マルテ醤油など伝統的和風建築、格子戸を構える町家が続くほか、近代的洋風建築の下町公民館（大正3年（1923）の旧役場）や石谷家むかひの火の見櫓（昭和17年（1942）頃建立）塩屋出店の敷地に建てられた洋館（昭和10年頃）（教会や子供達の文化育成のために利用された後、しばらく空き家になっていたものを平成12年修復し智頭町出身の映画監督西河克己監督の記念館として使用）等の洋風建物もこの宿場に残り、今も使われている。この歴史的なまちなみは大切にし、次の世代に引き継ぐまちづくりを行う必要があると考え、その活動にも筆者自らも関わったこの智頭宿の地域を調査研究の対象とした。

5.2 人口・世帯数等の特性

5.2.1 総人口および世帯数の推移

智頭町の総人口は昭和29年に山郷村を合併して、現在の智頭町になって以降、14,643人（S30国調）から徐々に人口を減らし、平成7年までは1万人をキープしていたが、平成8年（1996）（住民基本台帳）以降は1万人台を割っている。

しかし、逆に65歳以上の高齢者は昭和30年（1955）の944人が、平成14年（2002）（住民基本台帳）では約3倍の2,734人となり、高齢化率は平成2年（1990）より20%を超え、

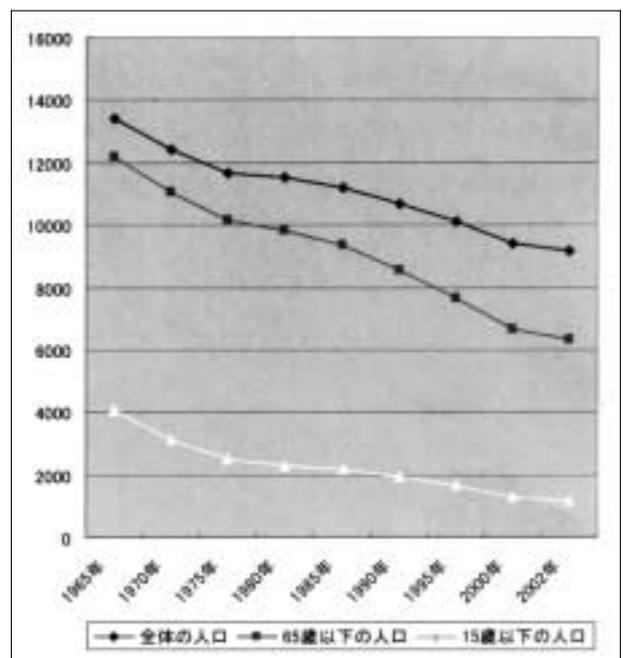


図5 - 3 智頭町の人口推移

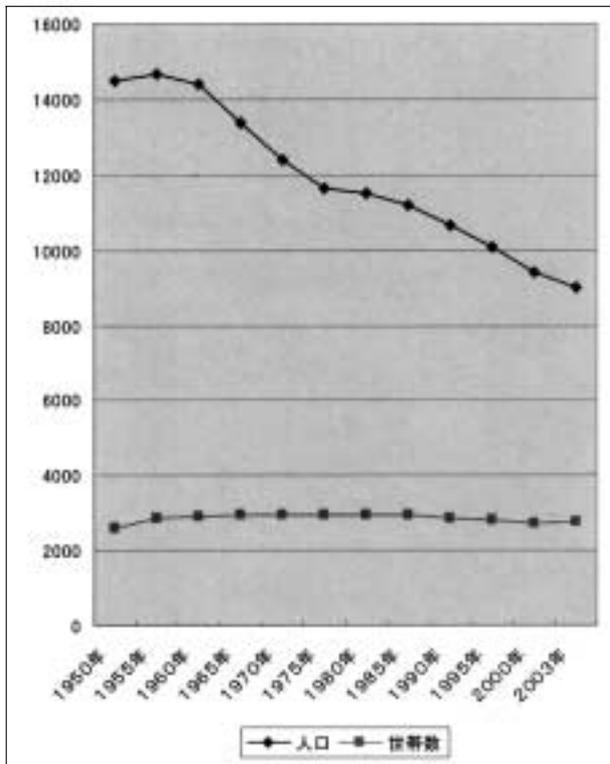


図5 - 4 智頭町における人口と世帯数の変化

平成14年では30%を越えている。

また、15歳未満の年少人口は昭和40年（1965）には4,048人であったが平成14年（2002）には1,193人まで大幅に減り、多かった昭和40年当時にくらべ3割以下の人口となっている。子供がいなくなり、高齢者の多い町となっている。

人口は減ったものの世帯数は昭和30年代とほぼ一緒の2,800世帯前後である。ただ、昭和40年代（1965）から60年代（1985）まで2,900世帯以上あったのがやや減少傾向になり平成15年（2003）は2,742世帯である。

この傾向は転出先の7割弱が鳥取市であることから、若い世代の鳥取市郊外への転出によるものと思われる。

5.2.2 智頭宿の人口推移

古くからの宿場町、智頭宿のあった上町、中町、下町は智頭町のほぼ中央にはあるがJR智頭駅前周辺の智頭町役場、J Aいなば智頭支所付近が現在は中心となり新たな宅地の開発は駅の反対側でされている。

しかしそのような開発は小規模なもので、

急峻な山間地の平坦な土地は少なく山間部にしては土地単価も高く、新しい宅地は鳥取市郊外に求める者が多く、智頭宿の若い世帯は結婚を機会に転出している。昭和50年（1975）1,406人あった人口が平成15年10月（2003）現在で869人と約6割に減っている。町全体の減少率に比べ、2割も多い。古くからの敷地で建物が建て込み、新たな宅地は求めにくい現状がある。

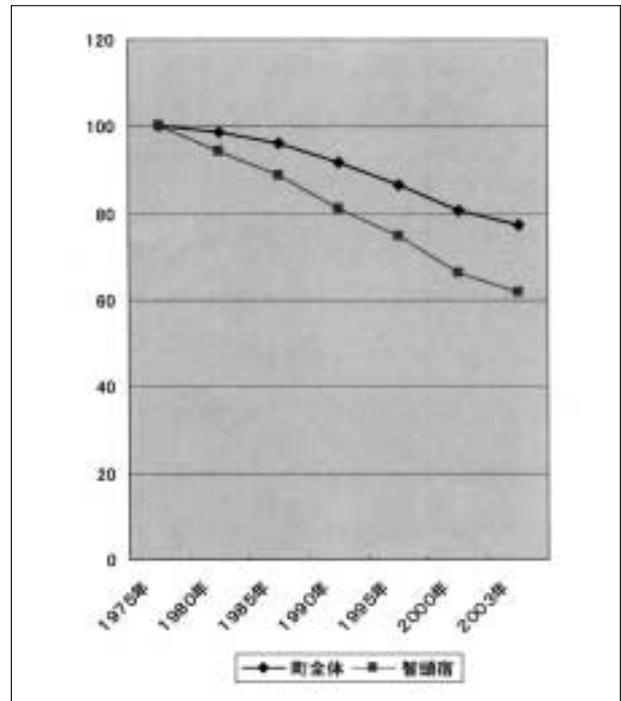


図5 - 5 智頭町と智頭宿の人口推移

5.2.3 町内別人口・世帯数の推移

智頭宿の上町、中町、下町の3町とも同じような減少傾向を見せている。上町で最近3世帯増えたが結婚による世帯増である。宿場の中心地からはなれており、比較的新しい地区で近くに高校、中学校、小学校、テニスコートやプールなどスポーツ施設があり、田畑もある。

一方、中町は宿場の中心で家は建て込み、古くからの景観を多く残す住宅街である。建物が古く隣家と接して車の駐車スペースがないなど、若者に好まれない傾向がある。下町も宿場の中心に、近く下の御茶屋があったところで旅館と酒造場があるが他は住宅地で比較的密集しており、中町と同じ状態である。

昭和48年（1973）から平成15年（2003）で、人口は上町が659人から447人、中町が329人から178人、下町が437人から244人と減り、30年で人口は約6割になっている。世帯数も減少しているが、世帯は3町内全体で、384世帯が30年間で2割減り、約8割の310世帯となっている。町内それぞれは、上町が173世帯から158世帯、中町が94世帯から64世帯、下町が117世帯から88世帯に減っている。

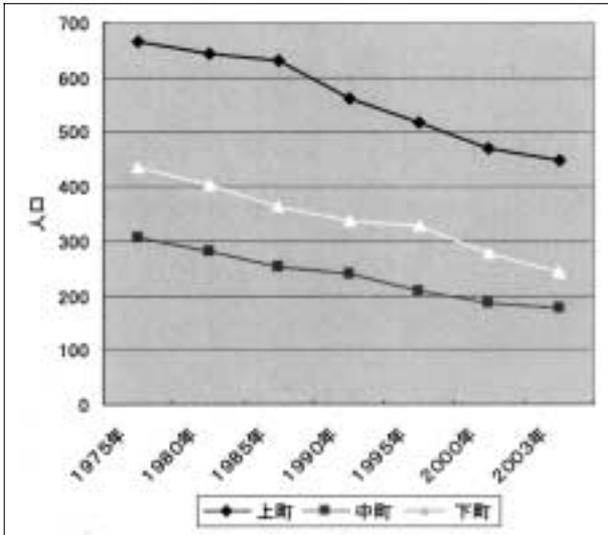


図5 - 6 智頭宿町内会別人口推移

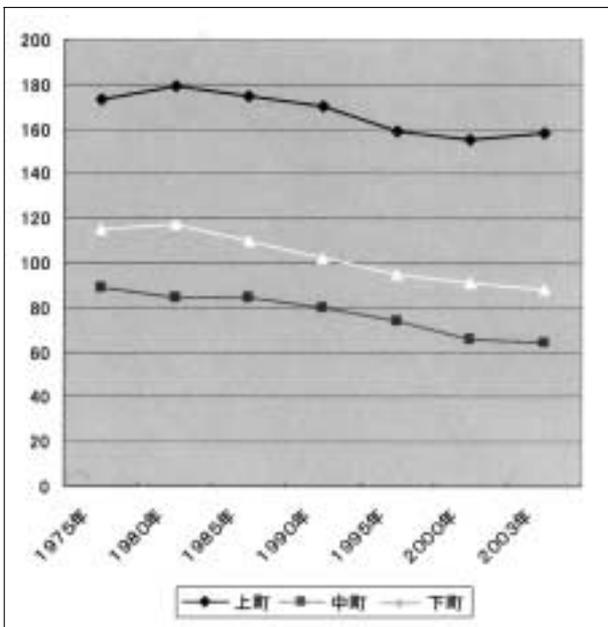


図5 - 7 智頭宿町内会別世帯数推移

5.3 アンケートによる居住の実態とまちづくりの意識

智頭町智頭宿については本研究のためのアンケートの実施にいたらず、平成12年9月～

10月までに智頭町と智頭宿まちづくり協議会からなる智頭宿まちづくり実行委員会が実施したアンケートを利用する。

また、現地踏査とまちづくり協議会メンバーの聞き取りを参考とする。

5.3.1 調査地域の居住形態

智頭宿はほとんどが住宅でそれ以外に大きな割合をしめているのが醸造業の諏訪酒造とマルテ醤油であり、旅館業の塩田屋と河内屋である。また、平成12年より一般公開された石谷家住宅や空き家になっていた通称「塩屋出店」とその裏にあった洋館とを平成13年に改修し、それぞれ「智頭宿観光ボランティア」の詰め所・休憩所と智頭町出身の西河克己映画記念館として使われている。

また、智頭町の歴史でも触れたように由緒ある仏閣や諏訪神社が地域内にある。建物はほとんど木造、2階建てで、街道筋からは平入りで軒の勾配がそろったまちなみを形成している。



図5 - 8 塩屋出店（平成15年：智頭宿まちづくり協議会パンフレット）

5.3.2 土地利用の実態

平成11年の土地利用図であるが、諏訪酒造とマルテ醤油の醸造場の大きな面積以外は住宅で智頭小学校、智頭農林高校につながる道路沿いに商店がはり付いている。また、中町を中心とする智頭宿は住宅が建て込んでいるがマルテ醤油、石谷家の後背地、上町の周辺には緑地が多い。



図5 - 9 智頭宿の土地利用図（智頭宿まちづくり協議会・智頭町）



図5 - 10 智頭宿のまちなみ（1998年智頭町・長岡造形大学修復工学研究室）

5.3.3 智頭宿を活かすための意識調査

以下の住民意識調査結果は、平成12年9月～10月までに智頭宿まちづくり実行委員会により実施されたものである。

調査対象は智頭宿の上町・中町・下町と隣接する錦町の16歳以上の男女854人を対象とし、回収された638名分の集計である。なお、不明なもの未記入のものは、個別の設問では除いて算出している。

問1 あなたは、智頭宿が智頭の特徴ある風物の一つであると思うか。

1. 思う 2. 思わない 3. わからない

4. その他

	人数
思う	312
思わない	130
わからない	165
その他	6

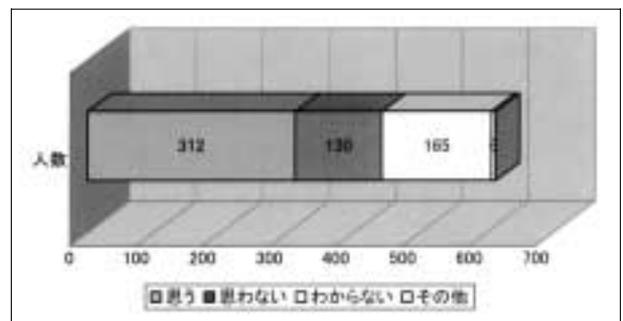


図5 - 11 智頭宿は智頭の特徴ある風物が

全体としては、「思う」が50.9%で第一位であり、「わからない」が第二位で26.9%、「思わない」は第三位で21.2%である。年代が高くなるほど「思う」の割合も高くなる。

地区別でも、どの地区も半数前後のものが「思う」を第一位に挙げている。また、男性の「思う」45.1%に対し、女性は55.1%とその割合が高い。

問2 智頭宿にある古い建物を保存することについてどう思いますか。

1. 是非保存した方がよい
2. できるだけ保存した方がよい
3. 保存しなくてもよい
4. わからない
5. その他

	人数
是非保存した方がよい	120
できるだけ保存した方がよい	382
保存しなくてもよい	36
わからない	74
その他	13

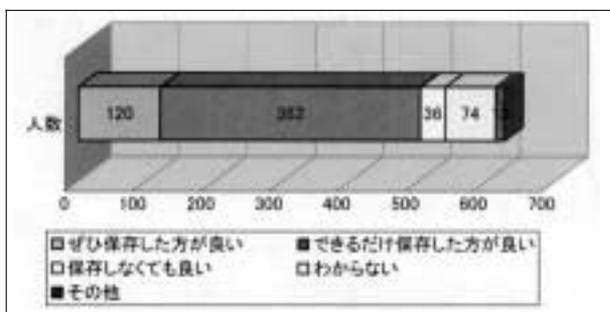


図5-12 古い建物の保存について

全体としては、6割が「できるだけ保存した方がよい」と答え、是非保存の2割を加えて8割が保存の方向に前向きである。年齢別にみても、10歳代では34%、20歳代は16%がわからないと回答している。保存しなくてもよいは全体では5.7%で、50代が10%に近いがあとは年齢的な特徴は少ない。

また、地区別でも、上町、中町、下町は6割前後のものが「できるだけ保存した方がよい」を挙げ、2割近くが「是非保存した方がよい」としている。江戸時代は宿場でなかった隣接地の錦町は10人のうち、6人が「是非保存した方がよい」、4人が「できる

だけ保存した方がよい」と答え、全員「保存」を望んでいる。

問3 あなたは、もし古い家屋を持っていると仮定した場合、古い町並みとして保存することについて協力したいと思いますか。

1. 進んで協力する
2. みんなに従う
3. 協力しない
4. わからない
5. その他

	人数
進んで協力する	112
みんなに従う	294
協力しない	35
わからない	160
その他	14

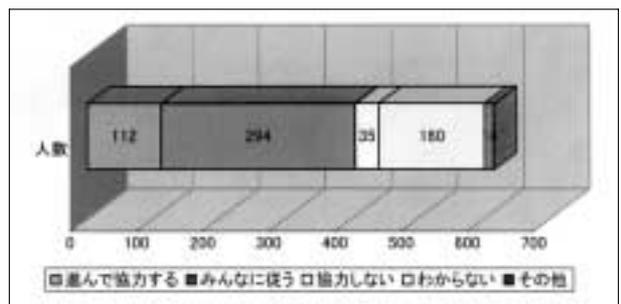


図5-13 古い町並み保存の協力について

全体としては、47.8%が「みんなに従う」で、「進んで協力する」が18.2%、「わからない」が26%である。

年代別で見ると、10代、30代は「わからない」が一番多く、それ以外の年代すべてで「みんなに従う」が第一位である。

地区別でも、どの地区でも「みんなに従う」が第一位で、自己主張の少ない、体制に従順な地域の体質のあらわれではないかと思われる。

なお、「協力しない」は全体の5.6%である。

問4 智頭宿の町並みを保存するためにどうすることがよいと思うか。

1. 現状のままの家並みを保存するために規制するべきだ
2. 伝統的な外観を保持するために規制し、内部について規制は不要

3. わからない 4. その他

	人数
規制すべき	99
外観のみの規制	257
わからない	218
その他	20

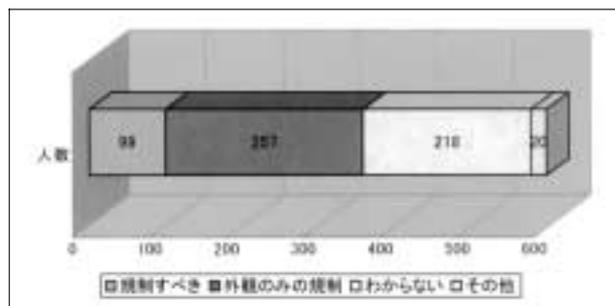


図5 - 14 町並み保存のために規制すべきか

「伝統的な外観を保持するために規制をし、内部までは不要」という意見が全体で、43.2%で最も多く、36.7%が「わからない」と回答している。「現状のまま規制」をふくめて、約6割の方が何らかの規制をかけることの必要性を感じている。

年代別では、20代以下では半数が「わからない」、70代以上は4割が「わからない」としている。

地区別では上町が「伝統的な外観を保持するために規制をし、内部までは不要」と「わからない」が同数で、「現状のまま規制すべき」が16%あった。中町、下町はほぼ、全体の傾向と同じである。

5.4 歴史的まちなみを活かした今後の方向

5.4.1 智頭町のまちづくりと智頭宿

智頭町は国体のあった昭和60年以降地域づくりが盛んになり、様々な取り組みがなされてきた。「日本0分の1村おこし運動」や「ひまわりシステム」など全国的にも有名になっているものもある。このような活動は住民自治による新しい地域づくりの思想が地域住民、役場を中心とする行政にも根付いており、智頭宿のまちづくりを住民主体で行う素地は十分にあった。智頭宿での取り組みは、

「自分たちの歴史的な環境をいきいきとよみがえらせ、自分たちもその歴史を保持し、つくりあげてきたまちなみ」だと誇りをもって次の世代に手渡すことができる取り組みに、いきおいがついてきた。伝統的建造物群の選定も視野に入れた取り組みが検討されているとの情報が、今回の調査を通じて入ってきた。

これまでの積み上げてきた実績を活かしたまちづくりを一緒にすすめて行きたいものである。

5.4.2 石谷家の公開と西岡映画記念館

現存している今の石谷家は大正時代の建築であり、池田藩の大庄屋であったが地域産業の振興をはかった篤志家である。その際、往来に面した町家づくりから武家屋敷風の構えに変えて、当時の建築技術の推移をしめす貴重なものが、智頭宿のまちなみ散策の拠点となっている。

また、昭和初期5年、塩屋出店の裏に、子



図5 - 15 石谷家住宅 (パンフレットより)



図5 - 16 西河克己映画記念館 (パンフレットより)

供達の文化育成のため建てられた教会が空き家のまま見捨てられていたが、平成12年、智頭出身の映画監督西河克己映画記念館としてよみがえった。

5.4.3 観光ボランティアとまちづくり協議会

平成13年の4月に、江戸時代、参勤交代の宿場町として栄え、今なおその面影を残す「智頭宿」の街並みを説明する、観光ボランティアガイドを智頭宿まちづくり協議会の中心メンバーが立ち上げた。

中心メンバーの江口貞一さんは「今7名で、活動時間は午前10時から午後5時まで、水曜日が定休日となっていますが、休日を知らないでお出でになるお客様があり、結局なかなか休めずに活動しています。特に訓練や研修をしていませんので、不安と心配のスタートでした。とにかくお客様との触れあいを大切に、真心でご案内をさせて頂くことを心がけている。」と話された。

また、「この頃では、お客様から感謝されて、お礼の手紙が届く程になりました。そして、なにより嬉しいのは“石谷家住宅”の立派さは勿論、“智頭宿”のまちなみの素晴らしさを来ていただいた方から褒めて頂くことです。自分たちはこんなに素晴らしい環境の中に住んでいるんだという自負心も生まれてきた。」ともいっている。

結局、ガイドすることで地域の人自身が地



図5 - 17 観光ボランティア活動（平成13年10月
地域活動ニュース）

域の歴史や文化、景観に何よりの自信をもてるようになったことがまず大切なことである。

第6章：歴史的まちなみ再生と これからの展望

6.1 歴史的まちなみ再生の価値

本研究は、鳥取県倉吉市、鹿野町、智頭町を事例として、歴史的なまちの背景を把握し、そこで行われているまちづくりが地域の活性化にどのようなことが有効であったのか明らかにする目的で行なわれたものである。

倉吉市では都市の二極分化や国鉄の廃止などで、郊外化、モータリゼーションの進行以前にすでに、衰退がはじまっていた。また、鹿野町、智頭町でも過疎化は緩やかに、しかし確実に進んでいたのである。高齢化の進行や人口減少は行政上の失策や怠慢ではなく人口構成上の必然の結果である。そのことをわきまえながら、地域の中で快適に充実感のある生活がいかに営まれるのかが問われてきているのである。

その一つの手法として地域の歴史や文化を見直し、その一環としてまちなみを再生整備し、成功している事例もあらわれてきている。

鳥取県でも倉吉市が平成10年重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、また民間でも空き家を利用した店舗などを開店させ賑わいを取り戻そうと模索している。また、鹿野町は伝統的な祭りに似合うまちなみをテーマに「街なみ環境整備事業」を実施している。さらに、智頭町では山林地主の石谷家より住宅の寄贈を受け、住宅を公開し、まちなみとあわせた散策観光が始まっている。それぞれ、地域独自の歴史風土、伝統文化は違うものの、歴史的まちなみという同じキーワードでまちづくりをすすめて、独自の魅力づくりに懸命になっている。

アンケートや聞き取り調査であきらかになったことは自分たちの歴史文化を大切にし、美

しいまちなみ整備をすることで、またさらに建物やまちをきれいにしたいという気持ちを起こさせる、善循環の効果があるという知見を得たことである。

そのためには、まずまちを好きになること。それはまちのことをよく知ること。そして、まちの成り立ちや歴史文化をよく調べること。それには、目に見えるものと見えないものと多様にあるが、それらは一つ一つが地域のアイデンティティを形成しているものである。

歴史的な景観には、その土地の住み良さの工夫が内蔵なれている場合も多い。現代の技術はそうした歴史的民家の知恵に及ばないこともあり、私たちはそこから学ぶべきだということもある。しかし、全く、過去の状態のままということではなく、変化していく社会や文化や技術の条件を考慮しながら、今後に残して行くべき高い価値のある空間をつくっていくことはとても意義深いことである。

これは、建築や都市計画の専門家がつくるのではなく、地域に住む住民自らが構築していくものではなからうか。いきいきとした生活空間と歴史的まちなみ再生は二律背反するものではなく、新しい文化は歴史的まちなみからも創造されて、さらに歴史を積み重ねていくものだと思慮するものである。

6.2 歴史的なまちなみ再生の課題と展望

「歴史的まちなみ」再生の現実的な効果はより精神的な価値であるが、その活用と再生は、私たちの日常生活にも、大きな価値を生み出す。この点については、すでに多くの意見があるが最後に今一度整理しておく。

1番目は、一般に「活性化」や「地域振興」と呼ばれているもの。

地域に対する経済的プラス効果である。最近、歴史的遺産を活用して多くの観光客を引きつける都市や村が少しずつであるが着実に増えてきている。とくに、これまでは観光資源と考えられなかった目立たない歴史的遺

産をうまく活用した例がかなりある。

2番目は、歴史的遺産を保存してゆく場合の経済的負担の軽減。

歴史的な建物と遺跡は、それらを修復して維持してゆくにはかなりの費用が必要であるが、活用による収入でそれらのすべての費用を賄えることは少ないがかなりの経費軽減になる。

3番目は、エネルギー消費の節減。

現代生活における多量のエネルギー消費が、地球の温暖化をもたらし、これからの人類の生活に大きな脅威となることは明らかだが、その節減の実行は進んでいない。

古くなった建物も、できるだけ再生・活用して使う。もし壊すような場合でも、木材などは再利用しようという運動が世界的に起こってきているが日本でもそのような動きがあるが、これから進めて行くべき課題である。

最後の4番目は、歴史的遺産の保存とその活用・再生が、私たちの日常の生活に与える豊かな楽しみ。

私たちは、日常生活でも旅先でも、古びた建物や小川にかかる石橋などに会うと何かほっとした気持ちになる。それは特に有名な建物や、年代のごく古い遺物とは限らない。

歴史を経たものが、身の回りのあちらこちらに豊富にあって見たり体験したりする機会が多いことの楽しみを適切な言葉で表すのは困難だが、イギリスでは、アメニティ（amenity）という言葉で、そのような楽しみを呼んでいる。日本語では趣、感興がそれに近いが、そのような趣のある「まちづくり」がこれからの日本に求められ、必要とされているのである。

謝 辞

倉吉の調査にあたっては鳥取環境大学の張漢賢先生とその学生のみなさん、鹿野の調査では倉吉で経験した何人かの学生と地元まちづくり協議会のみなさんのお世話になりました

た。

また、資料提供については、文中に記載の方の他、倉吉市役所、鹿野町役場、智頭町役場の関係のみなさんに大変お世話になった。

これらのまちづくりに係わっている多くのみなさんに深く感謝いたします。

参考文献

- 香山壽夫「都市計画論 - 私達の都市をいかにデザインするか - 」放送大学院教材 2002
- 田村 明「まちづくりの発想」岩波書店 1987
- 太田博太郎「歴史的風土の保存」彰国社 1981
- 稲垣栄三「文化遺産をどう受け継ぐか」三省堂 1984
- 高橋康夫、吉田伸之らの「日本都市史入門」全3巻東京大学出版会 1989、1990
- 伊藤 毅「都市の空間史」吉川弘文館 2003
- 矢作 弘「都市はよみがえるか 地域商業とまちづくり」岩波書店 1997
- 簗原 敬らによる「街は要る - 中心市街地活性化とは何か」学芸出版社 2000
- 池澤 寛「市民のための都市再生 - 商店街活性化を科学する」学芸出版社 2000
- 矢作 弘「地方都市再生への条件」岩波ブックレットNo479 1999
- 西村幸夫「町並みまちづくり物語」古今書院 1997
- 西村幸夫「環境保全と景観創造」鹿島出版会 1997
- 「第9次倉吉市総合計画」倉吉市 2001
- 住宅建設事業調査報告書 - 打吹地区住環境整備調査 - 倉吉市 1985
- 倉吉町誌 東伯郡倉吉町 昭和16年
- 倉吉商家町並保存対策調査報告書 倉吉市教育委員会 1980
- 「活路開拓ビジョン調査事業報告書」共同組合打吹 1999
- 張 漢賢「倉吉市打吹玉川白壁土蔵群周辺地域における居住環境とその改善」鳥取環境大学紀要第二号 2003
- 生田昭夫 倉吉の景観 2003
- 鹿野町誌 上巻 1992
- 智頭町誌 上巻 2002
- 長岡造形大学修復工学研究室「杉源郷智頭町板井原の集落と全建物」智頭町 1998
- 智頭宿まちづくり協議会 歴史をいかしたまちづくりの構想 2000
- 智頭宿まちづくり実行委員会 智頭宿のまちづくりに関する住民アンケート報告書 2001
- 智頭宿まちづくり協議会 まちなみ整備コンテスト事業報告書 2001